
命の光をみつけた夜

なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の光をみつけた夜

【Nコード】

N4527B

【作者名】

なぎ

【あらすじ】

つきつけられた現実には背を向けた夜。僕は夢中で命の光を探していた。

（前書き）

この小説は「命」をテーマにした企画小説です。「命小説」で検索すると、他の作家様の作品もご覧になれます。

目の前で急行列車が動き出す。それをぼうつと見送ると、すぐ後ろのホームからも重い音と共に、生温い風が吹き出した。これで何本目だろうか。地面に張り付いたように、僕の足はずっとここから動いてくれない。耳障りなアナウンスに促され腕の時計に視線を落とせば、もう既に日付は変わっていた。

改札を逆戻りすると、不在着信、の文字も無視して携帯の電源を切り、僕は家路から離れた。

今日、あの家には帰らない。恵の顔を見て、かける言葉なんて到底思いつかない。狭い部屋で僕の帰りを待っている恵の小さな背中を思うと、胸の奥がチクリと痛んだ。それを振り切って歩き出した僕は、どこの誰よりも愚かだろう。

情けにも似た笑いを噛み殺し、僕は全てに背を向けた。

夕方に出た会社を横目に通り過ぎ、数分歩くと小さな公園に着いた。遊具はブランコだけで、あとは木のベンチがある、公園とは名ばかりの狭い空き地だ。すぐそのビルへ毎日通っているのに、存在すら知らなかった。少し不気味に思えたが、僕は力なくベンチに倒れこむと、そのまま木目の温かさに身を預けた。

シャツの襟元へ手をかけネクタイを緩めながら、大きく息を吐き出す。目に映る夜空は、酷く濁っている。

どうして、こんなことになってしまったのか。世の中には、僕ら以外にもカップルは山ほどいるのに。何もかも、憂鬱だ。そっと目を閉じて、僅かな騒音と暗闇の中で思ったこと。今日の出来事が、夢ならいいのに――。

「ね、おきて」

——ああ、もう朝か？ 身体、重たいんだけど……。

「おきてよ、あそぼ？」

——何だよ、恵がそんなこと言うなんて珍しいな。子供みたいに、瞼も重い。そういえば、何で恵が居るんだろう。確か電車に乗らずに公園に行ったのに。

まさか、夢だったのか？

「おきてってばあ、おにいちゃん」

——おにいちゃん？

あまりの心地悪い違和感に、急に軽くなった目を躊躇う暇も無く開く。そこにあった顔は、大人びた端正な恵のものでは無く、見覚えもない幼い少女の笑顔だった。

「なっ……！」

言葉にならず飛び起きると、咄嗟に辺りを見渡した。目の前に佇むちっぽけなブランコ。夢では無い。

「おにいちゃんだれ？」

暗闇に溶けそうな黒髪をなびかせて、遠慮もなしにスーツの袖をクイツと引っ張ってきた。

「ね、ヒカリとあそぼ」

これだから子供は嫌いだ。だれかれ構わず馴れ馴れしくて、こつちが扱いに困る。

「ヒカリ？ お前の名前か。遊ばないから、とつとと帰れ」

首をならし軽く背を伸ばすと、背中にシャツがべったり張り付く。嫌な汗をかいた。心なしか寒気もする。目の前で首をもたげる少女の足元を何度も確認した。

「ヒカリ、ユーレイじゃないよ」

ギクリとした。ゆっくり少女の顔へ目線に移せば、不愉快そうに僕を眺める痛い視線にぶつかつた。女はいくつだつて勘が鋭いのか。

「だからあそぼ？」

「何でそうなるんだよ。一人で遊べよ、つーか帰れ」

肩を落とす少女を前に、少し言い過ぎたかとも思つたけれど。そんな事はすぐにどうでもよくなつた。そもそも、このヒカリという名前しか知らない少女に、僕が優しくしてやる義務などないのだ。僕はそんなにお人よしでもなければ、嫌いな子供の相手をするほどの余裕もない。

とにかく今は、誰にも構われたくない。子供なら、なおさらに。

あの時。電話越しに伝えられた言葉を受け入れる事ができなかった。

あまりに冷静な恵の口ぶりが、余計に現実味を欠いていたし、まさか自分達にこんな事態が起こるなんて、この五年間、想像もして

いなかったのだ。

「嘘だろ？」

同意を求めるように呟いた一言に、恵もまた一言だけでそれを否定し、さらに続けた。

「こんな嘘、私が言うと思う？」

解っている。恵はそんな冗談を言える女ではない。もしも恵が、今のは冗談よ、などと言えばきつと彼女に失望していただろう。

やっとありつけた昼食のカレーが喉を味気なく通り過ぎる。午前中の営業回りでくたくたになった体がさらに重く、社員食堂のいつもと変わらない光景が、途端にぐわんぐわんまわり始め、気の遠くなるような目眩に暫く動けなかった。

「とにかく、その、帰ったらちゃんと聞く」

そう言うのが精一杯で、恵はそんな僕に諦めたような口調で、だからメールでそういったのに、と溢した。

薄暗い園内に、懐かしい音が響く。錆びた金属がきしんで鳴くような、そんな音。ふと顔をあげれば、地に着かない足を遊ばせてブランコを揺らすヒカリがいた。

古いブランコをキィキィ鳴らすヒカリの視線は、真っ直ぐに夜空へと向けられている。澄んだ大きな瞳を輝かせ、何がそんなに嬉しいのか、無邪気に微笑んで。焦がれるように送る視線は、何も無い天上へ注がれていた。

少しだけ、胸が痛くなる。

「おにいちゃん、お星さまきれいだよ」
「そう」

空を見上げる動作など、もちろんしないまま適当に返す。そのうちつまらなくなつて、帰ってくれるだろう。それが一秒でも早く実現することを祈る。

けれどヒカリはブランコから降りようとせず、さらに大きく足を揺らし相も変わらず空へ視線を送っていた。

「おにいちゃんも見て？」

ヒカリはその瞳のまま僕を見た。ヒカリの煌くそれが、やけに勘に触る。その視線から、外れなくなる。

「星なんか見えるわけないだろ」
「見えるもん。ほら、すつごくきれいだよ」

僕はじつとベンチに座つたまま、腹の前で組んだ自分の両手を見つめていた。

「ねーえ、おにいちゃん！　きれいだよ？」

幼く甘つたるい声が、直接神経に響いてくる。

「悪いけど、そんな気分じゃないから」

頼むから、そつとしておいてくれ。何でもない事に、はしゃぐの

はやめてくれ。

「なんでえ？　きれいなのに！」

「煩いんだよ！　ひとりで見てればいいだろ？　わざわざ俺を巻き込むな！」

ヒカリの顔が曇っていく。力を失ったブランコが、鳴き声に余韻を残してゆっくり止まった。今度こそ言い過ぎた。じわりじわりと歪んでいくヒカリの表情に、何とも言えないバツの悪さを覚えてしまう。

けれど僕は、優しくなどなれない。優しくなんて、してはならない。

だって僕は、恵を独りにしてしまった。恵が言った僕らの現実に、自分だけ背を向けて今ここに居る。もう後戻りはできないんだ。今さらこんな気持ちを抱けない。

ヒカリに――、子供に。優しい気持ちなど、抱く権利はないのだ。

「俺は子供が嫌いなんだ。いらないんだよ、子供なんて！」

きつと恵は、知っていたんだと思う。彼女は頭が良いから、例えば電話越しでもきつと気づいたに違いない。

二人の間に授かった子供を、僕が望んでいないということに。

――赤ちゃんができたの。

――嘘だろ？

咄嗟に出た否定に値するそれに、恵を襲った感情はどんなものだったのか。今頃、何を抱いて僕を待っているのか。解るはずなどないのに、情けない胸はそれでも痛みを感じている。

「おにちゃん？」

自分の両手がぼやけて見える。瞼が熱くなる感覚など、いつ振りに味わっただろう。近くなったヒカリの声に頭も持ち上げられず、涙は重力に従って落ちていく。

「泣かないで」

自分だって、今にも泣いてしまいそうな声じゃないか。

ふと頭に温かい感触がして、それは小さな範囲で何度も僕の髪を撫でた。よしよし、と言わんばかりに繰り返され、やっぱり少し、胸を締め付ける。

なぜそんなに素直な行動ができるのだろう。たった今、自分に大声を放った人間に、なぜ優しくできるのだろう。なぜ、そんなに純粹でいられるのか。

ヒカリが見せる純粹さに触れるたび、本当は心の一番深い場所で、それを愛しく思っていたのに。それを認めたくなかった。同時に気づく自分の愚かさを、受け入れられる強さが無くて。

「ごめん。ごめんな、ヒカリ」

目線の高さに在るヒカリの頬に、できるだけ優しく触れてみる。

見た目よりも、うんと柔らかい。それを受けたヒカリがくすぐったそうに笑うから、つられて笑った僕の顔は、恵に向けるそれと一緒だったと思う。

すぐにヒカ리는背を向け、先程まで自分が揺らしていたブランコへ再び駆けていった。ヒカ리를乗せたブランコは、奏でる音とは裏腹に軽快に風を切っている。

僕は変わらずベンチに座ったまま、ゆっくり空を見上げてみた。薄っすら掛かる雲の向こう、欠けた月が顔を覗かせている。汚染された空気が邪魔をして、月明かりはもちろん、星の光など届かない。星などみえないと、あんなに否定したのは自分じゃないか。それを目の当たりにして、どうして落ち込む必要があるのか。

「あのね、暗くてもお星さまはみえるんだよ」
「え？」

僕の様子に気づいたのか、それともただのおしゃべりなのか。それでも僕は、ヒカリの言葉に耳を傾けた。

「曇っていても、空気が汚れていても。お星さまはちゃんと見えるんだよ。ちゃんと光ってるんだよ」

騒音すら聞こえなくなった静寂の中で、ヒカリの声がブランコの音と共に響く。

「あれはね、命の光だから」

命の、光？

「お星さまも生きてるんだよ。晴れても見えないお星さまもいて、それはすごく小さくしか光っていないけど、いつか見つけてもらえるようにずっと向こうで光ってるんだ。光が届く日を待ってるの」

いつしか僕は、首が痛くなるほどに夢中で天上を仰いでいた。何秒か目を凝らしていると、小さな小さな星を見つけた。

星の光を僕らが見つける頃、その星はもう、宇宙に存在していな

いかもしれない。そんな授業を、恵と出会った頃に受けた気がする。

「命の光なの。精一杯輝いた、命の光」

もしもあの小さな光が、遙か遠くの宇宙で今は存在していなくても。今この瞬間に僕らの瞳に映っている光は、何百年もの時を経て、あの星が精一杯に生きてた証を伝える為のもの。

ヒカリが繰り返す、命の光という言葉は、そういう意味なのだろうか。例えば本人が難しい事を解っていなくとも、僕にはそう聞こえてならなかった。

それから、僕らは互いにベンチとブランコで空を見上げ、汚れた空気の向こうに在る命の光を探していた。

「なあヒカリ。お前の親、心配しているんじゃないか」

今さらながら不意に気になって尋ねた。

「ヒカリにはパパもママもまだいないよ」

「まだ？」

優しく微笑むヒカリは、ブランコから身軽に飛び降り、僕の様子を伺うように頷いた。

「まだ。ずっと待ってたの。やっとママが見つけてくれたんだけど、パパはまだなの」

その言葉の意味が、よく解らない。ただ、こちらに歩いてくるその足取りと声が震えている事だけは、はっきり解る。

ヒカリに駆け寄ろうと、立ち上がった瞬間。僕の体は途端に言う

事を聞かなくなり、脱力してベンチに崩れ落ちた。

「ずっと待ってたんだよ」

体が動かない。ヒカリの言葉の意図も解らないまま。

「お星さまみたいにね、いっぱい輝いてみんなに見てもらおうのを待ってたんだ」

ヒカリの表情が悲しみに歪んでいく。大人になればきっと綺麗な女性になるんだろう。恵の泣き顔にどこか似ている気がして、訳も解らないのに胸が騒ぐ。

「待ってただけど……」

暗闇の中はつきりしない視線の先で、ヒカリがとうとう溢れた涙を、不器用に自分の手の平で拭っている。その景色さえ色を失くしてく。

「パパ……パパはヒカりに会いたくないの？」

「ヒカリ、お前……」

言い終わるより早く、僕は力を絞り出して小さな彼女を抱きしめていた。

この腕の中にある温もりと感触を、幻になどしたくはない。腕の中で泣きじゃくるヒカリの髪に、僕は何度も頬をすり寄せた。あやす方法も、なだめてやる方法も、上手くは解らないから。霞む景色の中で、ただヒカリの温もりを抱きしめていた。

僕が最後に見たものは、何も無い真っ白な世界に差し込む眩い星

の光と、泣き笑いのヒカリの顔だった。

次に目を覚ました時、僕はあまりの騒音に耳を塞いだ。

重く響く音と、金属が悲鳴をあげるようなけたたましい音が、聴覚を奪う。

目の前を急わしく流れるのは、一方向へ向かって歩く人の群れと、それを運んできた何台もの列車。

僕は、見慣れた、いや、何度も訪れ慣れたいつもの駅のホームで、ベンチの上に横たわっていた。頭上からは、朝日の光がホームのアーケードから漏れている。

「何で……」

「何で、じゃないわよ!」

勢いよく飛び起きる。立ちくらみに似た感覚の向こうに、息を切らした恵が珍しく怒りを露にして立っていた。ご丁寧に、腰に手をあてそれを強調しているように思える。

「帰って来ないし、携帯繋がらないし! 会社に泊まったのかと思っただけで、どうして駅で寝てるのよ!」

人目も気にせずそう叫びながら、何度も地面をヒールで踏みならす。

「お前こんな靴履くなよ、転んだりしたらどうするんだよ!」

情けない声で怒鳴ると、恵の腹に手をやった。膨らみもない、何の変化も無いここに、確かに命が宿っている。

急に静かになった恵は、驚いたような表情を僕に向け、それでも泣きそうな顔をしている。あの少女に似ていた。

「ごめんな。赤ちゃんのこと……」

「私、産むからね」

僕の言葉を遮って、恵は誇らしげに言った。

「私を選んでくれたの。絶対に産むわ」

やっぱり、ヒカリに似ている。恵の瞳は、星を見上げるヒカリのあの輝きと同じように煌めいていて。僕は思った。恵は、ヒカリを見つけたのだ。命の光を見つけたのだ。

「これから忙しくなるな。俺も頑張って働かなきゃ」

伸びをして、恵に目配せをした。鳴り響くベルの音を合図に、恵は声を堪えながら静かに泣いた。

「そつだ、名前。俺がつけてもいい？」

アーケード越しに天を仰いで、太陽の日差しに眉をしかめながら呟く。

今は見えなくとも、どこかで輝いているであろう命の光に、あの少女を重ねて。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4527b/>

命の光をみつけた夜

2010年10月10日11時48分発行